スウィフトの生涯（Ⅳ）

ウイリアム・テムプルの遺稿整理から
諷刺詩「火とかげ」制作まで（1701－5）

三　浦　　謙

1701年4月から同年9月にかけてロンドン滞在中，スウィフトは前章で触れた最初の政治パンフレット執筆の外，ウィリアム・テムプルの最後の書簡集の整理に追われていた。この仕事を通じて，1672年に始まって1679年のナイメーヘン条約[1]で終結したオランダ戦争の経緯を知ったスウイフトは，ルイ14世の侵略の意図が露わな1701年の緊迫した情況下でも対仏戦争は避けられないことを知った。ルイ14世は1700年スペイン王カルロス2世が嗣子なくして他界した時，孫フィリップをフェリペ5世として即位させた。ルイ14世は，こうして同じブルボン家をいただくスペインの広大な領土を海外植民地もろともフランスに併合しようとした。これはイギリスにとって大きな脅威となる。事実，スウイフトの危惧は現実となった。1701年の夏ウィリアムはオランダで，オランダおよびオーストリアと三国同盟を結び，フランスによるスペインの併合を妨げる旨の確約をした。この交渉のイギリス代表に当時オランダ駐在のイギリス軍指令官であったマルボロー伯[2]をウィリアムは任命した。こうして，三国同盟締結後12年におよぶスペイン継承戦争が始まる。そして同年11月の選挙ではトーリー党が完敗する。

だが，ホイッグの天下は短かかった。翌年3月8日ウィリアム3世が死んだからである。ウィリアムは政党間の確執に苦しみ，甚だしく健康を害していたが，2月21日たまたま落馬し，その傷がいえぬまま，約2週間後息をひきとった。ウィリアム3世の死はトーリー党の再起のきっかけと

なった。王の死後3ケ月を経過しないうちに，アン女王好みの内閣が作られた。ゴドルフィン[3]が大蔵卿に指命され，ホイッグからトーリーに移った。三国同盟のイギリス代表となった武将マールボローの娘はゴドルフィンの息子を夫としていたので，両者は姻戚関係にあった。この2人にハーリーを加えた3人がアン女王の下で向う10年イギリスを動かすことになる。

スウィフトはこれら有力者との接近を望んで1702年4月再びロンドンを訪れ，同年10月まで滞在するが，この間の活動は皆目知られていない。ただ，さきに触れたテムプルの最後の書簡集をこの時期に仕上げ，出版元のベンジャミン・トック[4]に原稿を渡し指示している。テムプルの著書は主に当時高名な書肆であったベンジャミン・トックとジャコブ・トンソン[5]が扱っていた。スウィフトはトックから原稿料として50ポンドの金子を受取っている。550ページからなるテムプルの最後の書簡集第3巻は翌年の1月トックの手で出版された。

スウィフトは1702年10月ロンドンを離れ1703年11月までアイルランドに滞在している。この間イングランドでは，勢威を増したトーリー党は臨時国教遵奉反対法案[6]を取り上げて，公職に就くさいのみ国教信奉の意志を表明しようとする非国教徒の締出しにかかった。トーリーが圧倒的に優勢な下院では，この法案はあっけなく通過したが，比較的ホイッグが優位に立つ上院では激論がかわされ，審議は進まなかった。トーリーは国教擁護のため法案の審議を押し進めようとしたが，便宜的な国教遵奉を宗教寛容の一手段とみたホイッグは法案に飽くまでも反対だった。ゴドルフィンとマールボローは対仏戦争の最中（さなか）での分裂を憂慮して，この法案を心よく思わなかった。スウィフトは当時この法案にたいする態度を公けにはしなかったが，『桶物語』では非国教徒が便宜的に国教遵奉の態度を示したことを頭から愚弄している。第11章末尾にジャックが大きな馬に乗ってカスタードを食べる条があるが，これはロンドン市長となった長老会派のサー・ハムフリー・エドウィン[7]がロンドン市長の勲章をつけて，非国教徒の秘密集会に出向くところを諷している。カスタードはロンドン市長饗

宴の席に出るお定まりの菓子だった。このように非国教徒を嘲笑しながらスウィフトは，内心では法案は国内の対立を深め国教会のためにもプラスにはならないというピーターボロー[8]ソマーズ，バーネットといったホイッグの政治家と同じ立場に立っていた。結局，スウィフトがアイルランドに滞在していた1703年2月この法案は廃案となった。

1703年夏をアイルランドで過ごしたスウィフトは同年11月ふたたびロンドンにやってくる。この年の冬，一時廃案となっていた臨時国教遵奉法案が再度国会で審議されることになった。ロンドンはこの問題で持ちきりだった。1703年12月6日のウイリアム・テイズダル師[9]宛の書簡で，スウィフトは当時の熱狂ぶりを次のように伝えている。「町中の犬がいつもよりも，ずっと傲慢無礼で嘩喧早くなっている。それに，法案が上程される前の晩，ホイッグの猫とトーリーの猫が国会の屋根の上で，激しいやりとりをしていた。だがこのことを，われわれは別段不思議がることはない。ご婦人連まで高教会と低教会に分かれて争い，宗教熱に軀られて，まともにお祈りする時間もないのだから」[10]結局，12月14日，前回と同じく廃案となったが，今回の激しい論議で，トーリー党はホイッグ党ばかりでなく自党内の穏健派をも敵に回すことになる。その後，2年間，穏健派が主導権を握るが，1707～8年にホイッグ党が再興して，トーリー党にとって代わることになる。

廃案後，ほぼ半年スウィフトはロンドンに留まるが，この時期スウィフトはいぜんはかない昇進の望みを抱いていた。1704年4月20日付のウイリアム・ティズダル師宛の書簡の末尾で「落ちぶれた元閣僚たちの体のいい言葉や望みを聞くばかりだ。私のささやかな望みや彼らの野心が遂げられないうちに，私の生活も彼らの生活も，このままでは駄目になってしまう。だから，私は不満を抱く宮廷人のように，にわかに隠退して，私自身の気分と当地の様子が変るまで，勉学と思索に吐け口をもとめることにした[11]」と述べている。こうして，スウィフトは，ホイッグの指導者たちに忿懣をぶつけながら，1704年6月1日アイルランドに向けて出立する。

1704年4月20日のティズダル師宛の書簡は，この外，興味深い一つの

エピソードを取上げている。それはティズダルがステラにプロポーズしたという一件である。これを知ったスウィフトはティズダルに向って，ステラへの想いを率直に述べている。

邪魔をするつもりはないがプロポーズするとすれば自分もステラ以外にはないといっている。スウィフトのいとこトーマス・スウィフトの息子でスウィフトの伝記作者であるディーン・スウィフトは，このさい，スウィフトがティズダルに年100ポンドの小遣ををステラにあたえ，ステラ専用の馬車を1台支度するよう要求したといっているが，シェリダンは，これはデッチあげで，根拠がないと否定している。ティズダルはスウィフトより2歳年下で，ダブリンのトリニティ・カレッジ卒業後特別研究員になり，その後ベルファストの教区牧師になった男で，座談の名手をもって自任していた。スウィフトとはかなり親密だったようだが，この1件があってからは2人の間は疎遠になった。

最後になるが，この時期忘れてはならないのは『桶物語』の出版である。『桶物語』は「書物戦争」と「霊の機械的作用にかんする論稿」の2篇を末尾に付して1704年4月か5月，ロンドンで上梓された。その年のうちに3版を重ね，翌年，原著者の許可を得た第四版がジョン・ナット[12]の手で刊行された。1710年，同じ書肆が第五版を出し，この時初めて，「著者の弁明」[13]とW．ウットン[14]その他の手になる注解が付された。この「著者の弁明」の中で，1696年に『桶物語』の大半をすでに執筆していたとスウィフトは述べている。その後，数年にわたって折にふれて加筆，1702年から1704年の間に，さらにソマーズへの献辞[15]と「書肆から読者へ[16]」を補足した上，匿名で出版に踏みきった。なぜソマーズへの献辞が添えられたか。ジョン・ソマーズは1651年生まれでスウィフトより16歳年長である。1688年の名誉革命で，頭角を現わし，革命後間もなく司法長官，1693年には国璽尚書，その後数年で大法官にのし上がった。スウィフトが前述の最初の政治パンフレット『アテネとローマにおける不和と抗争について』を書いたのは，もっぱら当時苦境にあったソマーズを助けるためであったといわれている。この一件があってからスウィフトとソマーズの親密度は深

まっていった。スウィフトは後年、司法に携わる者として，その傑出ぶりはかって類をみないとソマーズを賞めちぎっている。それにソマーズは1710年引退後は文筆に親しみ，1716年他界する迄，当時の文人にとって暖かいパトロンであった。スウィフトは書店主を仕立ててのこの献辞の中で，「服飾と舞踊にかけての際立った才能，代数学，形而上学および東洋の諸言語についての該博な知識をもつ」ソマーズの庇護を懇切にもとめている。ソマーズへの献辞が缺かせない理由があったのである。

「書店主から読者へのお知らせ」では原稿の入手は6年前であるといい，著者については匿名出版であるだけに，謎めいたことをいって読者を煙に巻いている。原稿は粉失したものと考えているので著者は本書の出版は知らないとか，著者について満足のいく説明はできないというのがそれである。

ところで，1696年3度目のムア・パーク滞在中に『桶物語』の大半は執筆されていたと述べたが，もう少し具体的にいうと，2，4，6，8，11の5章からなる宗教寓話がまず書かれ，その後，1697年6月から1698年3月にかけて「書物戦争」[17]，引き続き，「脱線」「続脱線」といった『桶物語』の残余の部分と「霊の機械的作用」が書き加えられたことになっている。宗教寓話は，それぞれローマ・カトリック・イギリス国教会，非国教徒をあらわすピーター，マーチン，ジャックという3つ児の3兄弟の行状記である。当初は父親の遺言を守って3人は神妙に暮すが，成人して都に上ると飲酒，喧嘩，女郎買い，間男と悪業の限りをつくす。そのうち，ピーターが威張りだし，一緒に暮していた2人の弟とその妻君それに自分の女房までも，家から追出してしまう。マーチンとジャックの2人は兄のピーターにいためつけられながら，互いにかばいあって暫く暮すが，父親からうけとったそれぞれの遺産の件で，2人はいがみ合うようになり，気性の激しいジャックは遂には気が狂って，提燈持ちのジャック[18]とか，乞食のトム[19]という綽名をつけられて町の子供たちからはやされるようになるという話である。非国教徒を蛇蝎視していたスウィフトは，ジャックに，この外ハゲのジャック[20]，オランダ・ジャック[21]，フランス・ヒュー[22]，

北のノックのジャック[23]といった綽名をつけている。これでもかこれでもかといった工合である。

「書物戦争」では当時盛んに行われていた古代と近代についての論争がテーマになっている。論争のそもそもの発端は，この問題についてのウイリアム・テムプルの論文である。『古代の学問と近代の学問について』[24]という論考で，ウイリアム・テムプルはルネッサンス以来，広くヨーロッパで行われていた論争を基盤にして，古代の学問が優っていることを主張した。テムプルは2つの点で古代の学問の優秀性を説いている。1つは，知識は異積的ではないということ。肝要なのは個人の天才であって文化遺産ではない。文化遺産は天才を養うよりは天才の芽をついばむという指摘である。もう1つは，歴史に裏付けをもとめて，哲学，修辞学，天文学，音楽，建築学，地理学のいずれの分野でも，古代が現代を凌駕しているという主張である。ところが，2つ目の点で，最後に文学とりわけ散文学に触れたさいに，テムプルは『イソップ寓話』と『ファラリス書簡』[25]が散文学最高の傑作であり，2作品はピタゴラス[26]と同時期であると断定した。これが近代を擁護する学者を刺激した。

1694年まずケンブリッジ大学のウィリアム・ウットンが『古代と近代の学問にかんする省察』を出して，近代を軽んずるテムプルを攻撃するが，その3年後に出る同じ著書の2版の附録で，ウットンの友人で聖ジェームズ王立図書館長のリチャード・ベントレィ[27]が『ファラリス書簡』と『イソップ寓話』が共に贋作で，それぞれファラリスとイソップの筆になる作物ではないと決めつける。これがきっかけで，ウットン，ベントレィー対オックスフォード大学クライスト・チャーチ[28]の学者連が華々しい論争を展開することになる。オルレリー伯爵家の御曹司で，著作『ファラリス書簡』を公けにするさい，聖ジェームズ王立図書館所蔵の古文書借覧の件で，館長ベントレィのいやがらせをうけて憤激したチャールズ・ボイル[29]は，もちろんクライスト・チャーチ側の一員である。

スウィフトは，このさい，一向に決着のつかないこの論争を冷静に見守って筆を執ったわけではない。スウィフトには，恩人のウイリアム・テ

ムプルが2人の成上り者の衒学者によって攻撃されたというだけで十分だった。当時は高邁な理想と高雅な趣味を旨とするいわゆるポライト・ラーニングが幅を利かせていた時代である。近代的な学問の方法はまだ確立されていなかった。こうした時代の趨勢に背を向けて，いたずらに近代を推賞する学者は，スウィフトには成上り者としか映らなかったのである。

「書物戦争」の中の「ベントレイとウットンの挿話」で，このご両人はスウィフトから，こっぴどくやりこめられている。まず，こんな工合である。

日もかなり暮れて，近代軍の数多くの兵力が後退を半ば思いはじめた時，近代軍の重装備歩兵部隊から1人の指揮官が現れた。その名をベントレイといい，近代軍中，最もぶざまな男である。背は高いが不恰好，軀は大きいが力強さもなければ均斉もとれていない。鎧は半端物の継ぎはぎだらけ。歩くさいに鎧がたてる音は甲高い乾燥音で，エテジアの季節風[30]に吹かれて，尖塔の屋根から，にわかに落ちてくる鉛板の音に似ている……右手で連枷（からさお）をつかみ，左手にはぎっしり詰った糞桶を携えていた（攻め道具には決して事欠かない風だったが）。……ベントレイが近づくのをみた近代軍の将師たちは，長靴と甲冑が隠しきれぬガニ股と瘤のある肩に気づき，吹きだしてしまう。並みいる将師は悪口の才を買ってベントレイを用いていた。その才能は一定限度に抑えれば自軍のため大いに役立ったが，破目をはずすと益よりはむしろ害をおよぼした。というのも，彼は少しでも気に障ることがあると，もしくは，よくあることだが，なんら腹を立てる理由がないのに，傷ついた象のごとく，やにわに，味方の大将に喰ってかかってきたからである[31]。

このベントレイがウットンを引連れて，恐々（こわごわ），戦場を歩くさまは，「尻尾を股間にはさみ舌をだらりと垂らし，抜き足差し足で忍びよる」「雑種のやくざ犬2匹」と変らないとこきおろしている。2人は戦場を彷徨ううちに若き勇士ボイルの目にとまり干戈を交えるが，両人ともボイルの槍術に太刀打ちできない。腕利きのコックが2羽の山鴫（やましぎ）を料理する時，足と羽を

括って横腹に鉄串を突き通すが，ちょうど，この山鴫さながらに，2人揃って，ボイルの槍に腹を突き貫かれたので，大地に倒れて息が絶えてしまう。この2人の死にざまをみたら，三途の川の渡し守であるカロン[32]も，1人とまちがえ，一人前の船賃で，スチクス川[33]を渡らせるだろうと嘲っている。

このように，ベントレイとウットンをスウィフトは俎上にのせて，盛んに揶揄するが，なんといっても，「書物戦争」一篇の白眉は，蜘蛛と密蜂の寓話であろう。この挿話は散文の範としても定評がある。数限りない蝿を食い殺して憎々しいまでに肥え太った蜘蛛と好奇心に軀られて窓硝子の破れ目から入りこみ，蜘蛛の巣の外壁に足を留めた密蜂とは睨み合って，お互いに次のように相手をこきおろす。まず，蜘蛛がこう毒づく。

「おまえごとき無頼漢（ならずもの）とひき較べて，わが身を汚すつもりはないが，おまえは家もなく財もなき一介の浮浪人に過ぎないではないか。生まれつき，おまえの身に備っているのは2枚の羽と1本の吹管（すいかん）だけだ。いずこであれ，一切お構いなしに自然を掠奪してとび廻るのがおまえの生業（なりわい）だ。おまえは野原や花園を荒らす奸賊で，盗みのためなら蕁麻（いらくさ）と菫の区別もつかない。それにひきかえ，この私は家庭第一主義で，生まれた時からの蓄財もある。この大きな城は（私の数学の上達ぶりを示すものだが）すべて私自身の手で，私自身の軀から抽き出した材料で築き上げたのだ」[34]

すると，密蜂はこう即答する。

「私の羽と声は正直に手に入れたものであることを，あなたが少くとも認めてくださったことはありがたい。……この上なく高貴な目的に役立てるのでなければ，このような贈物を2つも神様が私にくださったとは考えられないから。なるほど，私は野原や花園の花また花を訪れる。だが，私がそこで集めるものはすべて，花の美しさや香りや味わいをいささかも損わずに私自身を富ませてくれるのだ」[35] だが，蜘蛛はどうか。その築城技術は評価するとしても，材料はすべて自身の軀から抽き出し

ている点は自慢できるほどのことではない。蜘蛛は腹中に汚物や毒をたくさん蓄えていて，しかもその汚物や毒は他の虫を食うことで補給されている。「要するに，問題はこういうことになる。周囲4インチの世界で怠惰な瞑想にふけったり，威張りくさって周りを見くだしたり，自分と変らぬものを食って自分の軀から材料をひねりだしたりしながら，すべてを糞便と毒に変え，蝿を殺す毒と蜘蛛の巣の外はなにも産みだすことのないものと，世界を隈なく飛び廻り，長期にわたる研究と多大の勉学と正しき判断と事物の峻別によって蜜と蠟を家に持帰るものと，どちらのほうが高尚といえよう」(36)

この論議を武器を携えた両軍の書物達が片唾を呑んで傾聴していたが，真先きに沈黙を破ったのはイソップだった。イソップは大音声でこういいきる。

「両弁士とも，その論述ぶりは美事で，それぞれ，賛否両論いうべきことは余すことなくいいつくした。両者の推論を当面の論争に当てはめれば……その結論は近代派とわれわれ古代派の上に，ぴたりとそのまま当てはまる。なぜなら，諸君，風采，性向，詭弁にかけて，蜘蛛ほど近代的なものは，かつてなかったからだ……蜘蛛はすべてを自身の軀から吐きだして織物に仕立てると主張し，外からの恩義や援助を屈辱として認めようとはしない。そして，建築の技術と数学の上達ぶりを見せびらかす……だが，近代人が産みだしたものによって近代人の才能や創意を判断すれば，いずれも自慢するほどのものではない。いかに方法と技倆を存分に軀使して構築しても材料が己れの腹（近代人の脳味噌）から紡ぎ出された塵芥にすぎなければ，結局，出来上ったものは蜘蛛の巣に外ならない……そこへゆくと，われわれ古代人は蜜蜂とともに，羽と声すなわち飛翔力と言葉の外は自分のものを持っていると公言するつもりはない。その他のものは何であれ，限りない努力と研究を重ね，自然を隈なく飛び廻ることによって得られたのだ。相異はこの点にある。われわれは塵芥と毒の代りに蜜と蠟で巣を満たすことを選んだ。こうして，われ

われは人類に2つの最も高貴なるもの――甘美と光明をもたらしているのだ」[37]

「蜘蛛と蜜蜂」の寓話にはイソップの寓話のように末尾に教訓がついていないが，寓話は必ずしも道徳的寓話とはかぎらないので，教訓のあるなしは寓話の質にかかわりあいはない。ただ，ラ・フォンテーヌのいうように，寓話のよしあしは簡潔さと読んで楽しいかどうかにあるとすると，「蜘蛛と蜜蜂」は文句なく良質の寓話ということになる。

スウィフトは，この他，後年『牝ギツネ』[38] とか『寡婦とその飼い猫』[39] といった寓話を詩の形で公けにしている。そして，『牝ギツネ』には末尾にイソップ寓話にみられる教訓がついている。だが，いずれの寓話も，相手を論難するさいの言葉の面白さといったものもなく，ラ・フォンテーヌの挙げた2つの条件に照してみても，『蜘蛛と蜜蜂』の寓話には遥かにおよばない。

「書物戦争」に次いで，『桶物語』の残余の章で，とりわけ興味深いのは第9章「社会における狂気の起源と効用と改善について」という一章である。この中に次のような一節がある。

ところで，特殊な人たちのこのような雑多な想像を説明するのに，下等器官から上昇してきて脳をくまなく曇らせ，脳で蒸溜されて，さまざまな観念を生みだす蒸気現象に訴えることなしに可能かどうか，ご教示願いたい。国語の範囲が狭いため，狂気とか錯乱という以外に，この現象に当てはまる名称がない。[40]

ここでいう特殊な人たちとは，アレキサンダー大帝，ルイ14世のような権力者であり，エピキュロス[41]，ディオゲネス[42]，ルクレチウス[43]，デカルトのような哲学者である。このような人間を生み出す蒸気の出所をスウィフトの分身である『桶物語』の筆者は下等器官と考え，この蒸気が上昇すると王国の征服や新学説の提唱に向い，下降すると，痔疾に終ると結んでいる。

ところで，このような特殊な人たちの雑多な想像を解く鍵になる蒸気現象というのは，当時流行った動物精気説のことである。これには次のような事情がある。17.8世紀の医者は，精神異常は肉体疾患に原因があるとみて，患者に厳格な食事療法を施したり，下剤や吐剤を飲ませたりした。精神疾患の患者は，共通して胃痛や鼓腸（ガスが胃腸にたまること）を訴えるという考え方だったので，多くの医者は精神異常も肉体の不調のように，四種の体液（血液，粘液，黄胆汁，黒胆汁）の不均衡が原因であるというヒポクラテスの主張から脱却していなかった。だが，脳外科の開拓者といわれるトーマス・ウィリス[44]は吐剤や下剤を長期間服用させても回復の兆しがみられないことに気づき，体液病理に疑問を抱くようになった。ウィルスは最も複雑で謎の多い器官である脳が精神異常の原因であると考え，脳の血管内を循環する一種の蒸気である動物精気が人間の行動のすべてを支配するという仮説をたてた。ここで，彼は複雑な心理現象を，もっぱら，単純な病理に還元しようとして，怒りとか恐怖とか絶望とかという情念が動物精気の成分を変えさせると説いた。彼が狂人の治療に殴打を認めたのは，殴打によって狂人の激情が静まり，その動物精気が正常にもどると考えたことによる。スウィフトが狂気の起源に，この動物精気説を用いたのは，彼自身気に入ったからなのだろう。

スウィフトの狂気への関心はその後も続く。1710年12月には，スウィフトは3台の貸馬車を仕立ててロンドン南東部に位置していた精神病院ベドラム[45]を訪れている。ベドラムは1770年の公開禁止にいたる迄，死刑執行を行ったタイバーン[46]と共に，当時は一種の観光名所で一般市民の多くは遊山気分で見物に出かけた。スウィフトのベドラム参観に同行した者には，おもしろいことに女性が多かった。スウィフトとたまたま同じ貸馬車に乗合わせたのは3人とも女性――ケリー夫人[47]，プラット夫人[48]，カドガン夫人[49]――である。ケリー夫人はケリー卿の奥方で，スウィフトのお気に入りの1人。スウィフトの健康を気づかって薬酒を送ったりしている。プラット夫人は大蔵次官の連れ合いで，ケリー夫人とは親しかったらしく，しばしば行動を共にしている。カドガン夫人はカドガン陸軍中将の

妻君である。2番目の貸馬車には，ケリー夫人の息子とその家庭教師に2人の殿方。残る3番目の貸馬車には，ケリー夫人の兄であるシェルバーン卿[50]の子供たち他，数名の未婚の女性が乗った。彼らは朝10時にピカデリーのシェルバーン邸を出てロンドン塔に向い，動物園を見物してから，ベドラムを訪れ，人形芝居を見て夜8時に帰宅している。なかなかふるった順路である。だが，たいへんな雨降りだった上に，女性客が騒々しかったので，スウィフトは相当うんざりした模様である。

スウィフトには，ベドラムに引寄せられるもう一つの理由があった。ベドラムは三文文士の巣食うグラブ・ストリート[51]の近傍という意味もあってか文筆との繋りが深かったのである。病院正面南側の長い柵が古本の広告を貼る掲示板に使われ，病院の塀に沿って古本屋の露台がズラリと立ち並んでいた。ベドラムは当時名だたる古本のマーケットでもあった。その意味でも，本好きのスウィフトには魅力のある場所であったに違いない。

さらに，スウィフトは1714年2月ベドラムの理事になっている。だが，その後，間もなくアイルランドに退いたので，ベドラムの理事としてのめぼしい動きはみられないが，1735年のダブリン市長と市の参事会員宛の遺書には、遺産を精神病院の建設資金に当てるよう依頼しているので，スウィフトにとって，狂気への関心は生涯続いたことになる。

なお，『桶物語』については，当時，共作ではないかという噂が流れた。共作の相手はいとこのトーマス・スウィフトである。この件にかんしては，版元のベンジャンミン・トックに宛た1710年6月29日付の手紙の中で，スウィフトは次のようなことをいっている。

このはなしの背後にいるのは牧師をやっている私のいとこです。私が原稿の一部を彼に渡したら，私がアイルランドに行っている留守中に，外に持出して見せびらかし，私との共作であると，まことしやかに触れまわったのです。彼にあなたが会ったら，2，3質問なさって，お望みとあらば，次の版でお名前を載せますがいかがでしょうかと，からかってみてください。馬鹿の厚かましさもどこまでゆくか知れたものではあ

りません。

ベンジャミン・トックは，結局，共作の噂を取り上げなかった。今日，『桶物語』がスウィフトの単独の著作であることを疑う者はいない。

ところで，1704年6月から1707年11月迄スウィフトはアイルランドに滞在した。この間のスウィフトの記録は今日ほとんど伝わっていない。ただ，この時期にスウィフトは興味深い詩を2，3作っている。その1つは1705年制作の「火とかげ」[52]である。同年，アイルランドの最高指令官としてカッツ卿[53]がダブリンに赴任してきた。ジョン・カッツは1690年男爵に叙せられ，当代にあって最も傑出した軍人の1人だった。敵の激しい砲火を浴びても，ビクともしなかったところから，火とかげ（サラマンダー）の異名があった。

軍人嫌いのスウィフトはカッツを嫌った。スウィフトは早速「火とかげ」を書いて，カッツを大いに怒らせた。

To paint a Hero, we enquire
For something that will conquer Fire,
Would you describe Turenne or Trump
Think of a Bucket or a Pump.
Are these too low? — then find out grander,
Call my Lord C — a Salamander. [54]

(17－22)

英雄を描くにさいして
火を制圧するものとなると，何がよかろう。
チューラン[55]やトラム[56]なら
バケツとかポンプが思いつく
これでは低俗すぎるか。それでは，もっと高尚にして
わが　カッツ卿を火とかげとよぼう。

This Serpent is extreamly cold,

So cold, that put it in the Fire,
'Twill make the very Flames expire,
Beside, it Spues a filthy Froth,
(Whether thro' Rage or Love, or both)
Of Matter purulent and white
Which happ'ning on the Skin to light,
And there corrupting to a Wound
Spreads Leprosy and Baldness round.

(48 — 56)[57]

この爬虫類はたいへんな冷血動物で,
火中に入りこんで
燃えさかる焔を消し止める。
それに（激怒か愛情か，もしくはその両方のせいからだろう）
化膿した白い不潔な泡を吹き出す。
その泡が皮膚に止まって傷となり
ライ病とハゲを蔓延させる。

カッツ卿嫌いは，その後も長く続いた。ほぼ30年後，「マッキーの人物列伝」[58] では，彼のことを「生きている愚物の中で最悪で，この上ない見栄坊」とくさしている。

注

(1) The Treaty of Nijmegen (1679). 1672年ルイ14世はドイツ諸侯と結んで10万の大軍で突如オランダを侵攻した。オランダ侵略戦争である。ルイ14世は6週間で終える腹づもりだったが，丸6年続いた。その上，戦争が長びくにつれヨーロッパ諸国はフランスを敵視してオランダに加担するようになった。その結果ルイ14世は孤立した。そこで，フランスはやむなく，ワール河に面したオランダの都市ナイメーヘンで和睦するにいたった。

(2) John Chnrchill, Duke of Marlborough (1650－1722). 将軍，政治家，ナポレオンと並び称される戦術家．スウィフトは，マルボロウの軍事上の功績は敵と味方によって評価は異るが，文句のないところである。性格は，よくいえば

お追従ととられようし，悪くいえば非難していると受けとられるだろうが，なかなか複雑なので，いずれの性格とも断じがたいといっている。

(3) Sidney, Earl of Godolphin (1645－1712). 政治家，もともとは実業界に入るところを，近習に取り立てられ，四代の君主に仕えて，アン女王の治世には大蔵卿にまで出世した。

(4) Benjamin Tooke (c. 1642－1716).

(5) Jacob Tonson (c. 1656－1736).

(6) The Bill against Occasional Conformity (1703－4).

1689年の宗教寛和条例は非国教徒に不利な一連の法律を徹廃させることになったが，1673年のテスト・アクトはそのまま残り，いぜん効力を発していた。そこで，公けの地位を望む非国教徒は形式を整えるため一時国教への遵奉を宣誓するという対策を講ずるようになった。法案はこのような慣行を封じるための手段だった。

(7) Sir Humphrey Edwin (1642－1707).

(8) Chrles Mordaunt, Earl of Monmonuth and 3rd Earl of Peterborough (c. 1658－1735). 軍人，外交官.

(9) William Tisdall (1669－1735)

アイルランドの牧師.

(10) *The Correspondence of Janathan Swift* (Oxford) Vol. 1, p. 38－9.

(11) Ibid., Vol. 1, p. 46.

(12) John Nutt. 出版業者. スウィフトの最初の政治パンフレット *A Discourse of the Contests and Dissensions in Athens and Rome* も出している。

(13) *An Apology*

(14) William Wotton (1666－1727). 牧師，学識者.

(15) *To The Right Honourable, John Lord Sommers*

(16) *The Bookseller To The Reader*

(17) *The Battte of the Books* 正式の書名は *A Full and True Account of the Battel fought last Friday, between the Ancient and the Modern Books in St. James's Library* である。

なお，『桶物語』のいわれ，宗教寓話の詳細，「霊の機械的作用」については，拙著『スウィフト管見』第8章を参照されたい。

(18) Jack with a lantern.

内なる光を主張する新教徒.

(19) Tom the beggar.

16世紀にスペインの圧制に反逆したフランドル地方（ベルギー）の新教徒は the Gueuses（乞食）とよばれた。

(20) Jack the bald. フランスの神学者 John Calvin (1509－1564) を指す。ラテン

語 calvus は「はげ頭」の意味.

(21) Dutch Jack.

ライデン生まれの Anabaptist 派（再洗礼派——成年後の再洗礼を主張する新教の一派）の狂信者 Johann Bockelson (1510－1536) のこと。

(22) French Hugh.

16, 7世紀のフランスの新教徒の一派 the Huguenots（ユーグノー教徒）を指す。

(23) Knocking Jack of the north.

スコットランドの宗教改革者 John Knot (1505－1572) のこと.

(24) *Essay upon the Ancient and Modern Learning* (1690).

(25) *Epistles of Phalaris.*

ファラリスは紀元前6世紀のシシリーの君主.

(26) Pythagoras. 紀元前5, 6世紀のギリシャの哲学者.

(27) Richard Bentley (1662–1742).

(28) Christ Church College, Oxford.

(29) 4th Earl of Orrery, Charles Boyle (1674 – 1731).

(30) an Etesian wind.

エーゲ海地方で, 毎年夏に, 約40日間吹く北西風.

(31) *The Prose Works of Swift,* Vol. 1. p. 182.

(32) Charon. 冥途の川を渡る船の船頭（ギリシャ神話).

(33) the Styx. 冥界を七巻きして流れる三途の川（ギリシャ神話).

(34) (35) (36)

The Prose Works of Swift, Vol. 1, pp. 169 – 70.

(37) Ibid., pp. 171 – 2.

(38) *The Fable of Bitches* (1715).

(39) *A Fable of the Widow and her Cat* (1711 – 2).

(40) *The Prose Works of Swift,* Vol. 1, p. 116.

(41) Epicurus (342－271 B. C.) ギリシャの哲学者, 節制による平静を最高善の快楽と考えた.

(42) Diogenes (412 – 323 B. C.) ギリシャの哲学者。大樽の中に住み奇行に富んだ。

(43) Lucretius (99－55 B. C.).

ローマの哲学者, 詩人.

(44) Thomas Willis 生歿年未詳.

(45) Bedlam. St. Mary of Bethlehem 精神病院の通称. 同病院の前身は1247年ロンドン市内に建てられた修道院で, 1547年に精神病院となった。だが, 当時の精神病院は問題が多かった. たとえば, 病院側は貴重な収入源が減ることを

恐れて，参観者が理不尽な振舞いをしても遺責することはなかった。参観者を野放し同然にした背後には，理性を奪われた人間は侮辱されても屈辱を感ずることはないという非人道的な意識が働いていた。病院というよりは動物園なみで僅か1ペニーの参観料で彼らは心ゆくまで患者をいじめることができた。看護人に半クラウンのチップもはずめば，おもしろそうな狂人の居室に彼らを案内する仕末で，このような参観者の数は，年間96,000人は下らなかったという。

(46) Tyburn. ロンドンの死刑執行場。今日の Hyde Park の Marble Arch 附近にあった.

(47) Lady Anne Kerry.

(48) Mrs. Pratt.

(49) Mrs. Margaretta Cecilia Cadogan.

(50) Lord Shelburne.

(47) (48) (49) (50) 生歿年未詳.

(51) ロンドンの Moorfields に近い Milton street の旧名. 17, 8世紀に貧しい文士が数多く住んでいた.

(52) *The Description of a Salamander* (1705).

(53) John Cutts (1661 - 1707).

(54) *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford), Vol. 1, p. 83.

(55) Marshal Turenne (1611 - 75). フランスの勇将.

(56) Martin Harpertzoon Tromp (1597 - 1653). オランダの提督.

(57) Op. cit., p. 84.

(58) 当時の宮廷に出入りしていた John Machy なる男の *Characters of the Court of Britain*（イギリスの宮廷人物月旦）にスウィフトは彼なりの寸評を添えている. *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford), Vol. V, p. 261.

主要参考文献

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

John Forster, *The Life of Jonathan Swift* (Folcroft, 1972).

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D. (London, 1908).*

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Michael V. De Porte, *Nightmares and Hobbyhorses* (The Huntington Library, 1984).